

色彩景観考・金沢

山岸政雄・森嘉紀

はじめに

多くの都市が人口の集中により急速に変貌してゆくなかで、金沢が、その400年来の歴史的伝統と、現代都市としての機能の上でどのような相貌を持っているかを、都市環境における色彩景観を軸に、都市の観想にも敷衍しながら考察を進めたい。

①色彩調査の対象となった関係町名は次の通りであり、それらは、市東部に位置する「卯辰山麓寺院群区域」(5ha)と「卯辰山風致地区」(177ha)及び「浅野川風致地区」(13ha)、中央部の「長町武家屋敷郡区域」(2ha)「中央風致地区」(88ha)にまたがる広域区に、金沢市が昭和47年以来設定している「城下町みて歩きコース」が中心になっている。

a) 中央コース関係町名

丸の内、兼六町、兼六元町、大手町、西町四番丁、西町五番丁、尾山町、高岡町、長町3丁目、長町2丁目、長町1丁目、香林坊2丁目、香林坊1丁目、広坂2丁目、広坂1丁目、本多町3丁目。

b) 卯辰山麓コース関係町名

丸の内、兼六町、兼六元町、大手町、尾張町1丁目、尾張町2丁目、彦三町1丁目、橋場町、東山1丁目、東山2丁目、山の上町、森山1丁目。

なお、以上の町内には、兼六園、尾山神社、武家屋敷、藩政時代の街並、旧四高、50余の寺院群、東山界限の街並など国、県、市指定の名勝、文化財、史跡、歴史的景観を有する街並などが多数散在している。

②調査期間—昭和49年(1974)～昭和50年(1975)にわたり、金沢地方において最も季節の特徴が現れる期日を選び、秋、冬、春、夏の四季につき、時系列連続調査を行った。(秋)昭和49年10月、11月、(冬)昭和50年1月、2月、(春)

同年4月、(夏)同年7月の各2日～3日間にわたり、晴天または快晴時の午前10時～12時、午後1時～2時の同一日照時を基準とした。

③調査者は当該研究者及び学生等随時数名

④資料蒐集はリバーサルカラーフィルムを使用し、定められたコースに従って、実験距離約60mごとに道路中央及び逆光の場合は近似条件にて進行方向を原則として撮影した。道路の交叉点では各々の交叉路線に向けて撮影し、曲折する場合は実験距離に至らなくともその都度記録した。視点の高さは平均1.5mである。

⑤記録量(地点)—多寡のあるのは、重複、失敗のためである。

・中央地区—(秋)84、(冬)158、
(春)132、(夏)236、

・卯辰山麓地区—(秋)85、(冬)85、
(春)238、(夏)163

⑥記録機材Fujichrome R100 (Daylight), Minolta SR-1 MinoltaSR-T-101 200mm, YASHICA E35

⑦分析法—四季のカラーゾーン変化、分布について、フィルム写像をスクリーンに投影し、Munsell System (Matte Finish Collection) を使ってH V/Cの視感比較を試みた。(Hue)—5R, 5YR, 5Y, 5GY, 5G, 5BG, 5B, 5PB, 5P, 5RP。(Value)—1～9.5。(Chroma) 2～16。プロジェクター—ELMO 1kw。Standard White Illuminator (Xenon Lamp XS 500) Toshiba を使用。

スクリーンには、縦5等分、横3等分、計15面のグリッド(grid)を引いておき、一場面につき、各々15回のHV/C比色を試みた。さらに別紙に集計した母集団を基に、各区域のH (Munsell Hue), V (Munsell Value), C (Munsell Chroma)につき、四季それぞれの頻度を記録しFig. 1～6のグラフに表わし、それから次に述べる景観の分析読取討議を行った。

⑧結果及び考察—本調査地域についてその景観を支える特徴的要因として、次のものがみられる。

1. 地勢要因—丘陵，河川，用水路など。
2. 家屋素材—木材，樹木，石垣，土塀など。
3. 標識など—交通，地名板，屋外広告物など。
4. 新建材の問題，高層建築物との関連。

次に，より色彩景観との関連における考察，結果を Fig. 1～6 のグラフを主体に記した。

なお，慣用色名に該当するマンセル記号については，色名大辞典（日本色研編1954）を視感比色した小磯稔氏の研究に負うところが多い。

Fig. 1 — 「中央地区」における色相分布。

秋—誰でも像として浮ぶ秋は，紅葉の季節であり，色が一番賑やかでカラフルな時期である。なかでもベージュ（French Beige）や蜜柑色（Mandarin Orange）を中心に，その前後の明度化も加わり，繡（そひ）（Tangerine Orange）のようなさえた黄赤から，ごくうすい黄赤の浅香色（Vanilla）や，萱草色（Apricot）のあでやかな色と焦茶（Van Dyk と Brown），枯葉色（Russet Brown）の暗い黄赤の類が弱い秋の陽射と冷気のなかで交響する風景は，森

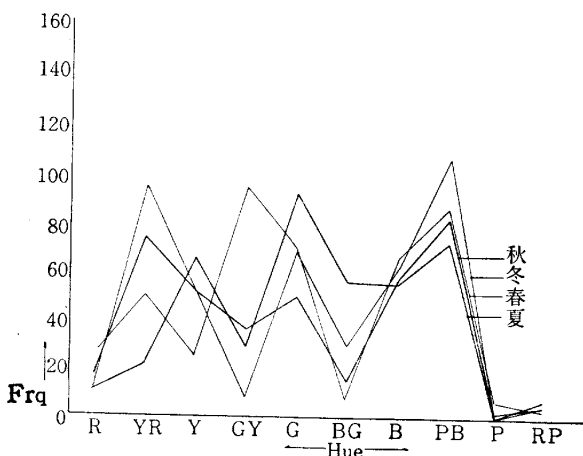


Fig. 1

の都の圧巻である。だが Fig. 2 に Y 系を中心に曲線が突起しているのと比較した場合の中央区の樹木の色相量は，都心のビル開発や宅地化，駐車場スペースの激増による庭が失われる

ことにより，卯辰山麓区の半分以下であることが明らかになった。どこの都市の都心にも緑があり，紅葉がみられるのは珍らしくないが，しかし，どのように東京丸ビル街の皇太子成婚記念噴水周辺や，東京のロンドンであった仲通りの街路樹が美しくとも，グレイスーツに締めた鮮やかなアプリコット柑子色のタイが，アクセントカラーであるのと同じ位にしか巨大な灰色のビル空間のなかでは植生がエコロジカルな意味を持つことはない。その点で金沢の都心も危険信号が出されたといえる。特徴的なのは，春夏秋冬を問わず紫味のうすい青の周辺が多いことである。観察時を快晴に合せたため，空色（Sky Blue）が顕色していることもあるが調査用グリッドの主に下半 3 分の 1 に，一様に 5 PB $\frac{1}{4}$ または 5 Y $\frac{1}{4}$ ，5 PB $\frac{1}{4}$ という高明度でほぼ灰色に近い色相域がみられ，それはコンクリートとアスファルトを象徴し，高層建築のある都心では，天空近くまで同系色に覆われるため，一層，無味乾燥な色彩景観を呈することとなった。この点も卯辰山麓の寺院群の多いたたずまいと対照的である。

冬—金沢の冬の色相は，中央区において 5 Y R 系と 5 P B 系，5 G 系の 3 つの顔をみることができる。5 Y R 系は，木々が枯れ，その木立がにぶい黄赤である駱駝色（Camel）を示し，更には見えなかった木造家屋の形相が群となって黄味がかった茶色やカーキ色，時にはわずかに紫みの暗い灰青，栗色（Nutbrown）となって景観色をなす。その背景には藩政期独特の破壊消防で知られる火消や，用水に代表される消防機能もさることながら，徹底した防火思想が金沢の街並を今日まで保存している。また第 2 次世界大戦で全国 92 都市が焦土と化し，230 万戸が焼失したなかであって，完全に戦禍を免れたことも銘記されねばならない。加えて，石積，石垣，土壁，土塀が相当多く，Y R 系のデータを押し上げていることも忘れてはならない。5 G 系が冬に比較的多いのは，常緑樹であるマツやタブの影響であろう。これはしかし陽当りを塞ぎ，昼なお暗い住空間をつくり健康によくなかった。(2) 金沢市内の街路樹は 7 千本か

ら1万本近く植えられているが、金沢市は緑の都市宣言と拘わって、昨年（S. 50）から毎年8月末頃行われる街路樹の枝下し剪定のとき、上部を瘤状に残すことになった。この処置は、景観を形成する要因としての、木々のユーモラスな形の楽しさが、冬の寒空のもとで人々に安堵感を与え、心の通った都市景観の形成に役立っている。

5PB系はアスファルト、コンクリートが主であるが特に市の中心部で最も繁華な香林坊境界が再開発され、巨大なビル群となるとき色彩計画は慎重を極めねばならないだろう。

冬になると一段と姿を現わす葺の波は、金沢の代表的風景とされ、一坪にタテ7枚、ヨコ7枚、計49枚で四九版といわれる茶味の暗い灰色から、黒みがかかった茶色や、黒椽の色相に該当する色域をなしている。そして寒冷による亀裂を防ぐために塗られた釉薬は光に映えて街を面鏡映の世界に誘い込むほど幻想的で美しい。しかし前述したように、近年のカラープレートやスパニッシュ瓦など、ビルラッシュはやがてその風景を消し去ることだろう。

金沢はまた雪国の顔を持つ街であるが故に、降雪時の色彩も問題にされねばならない。事実多量の降雪が街をすっかり覆ってしまったときは、まさに白一色銀世界という表現以外は見い出せない。そのような景観のなかではむしろ高彩度の青や赤の広告塔が吹雪の折などは特に霧の効果と呼ばれる色彩現象を呈し美しくもあるのは、新しい都市景観としてみるときには興味深い。兼六園をはじめ、家の庭の其処此所に、雪から樹木を守るために、幹の頂上から枝にかけて張られた数十本の雪吊といわれる綾は、その三角錐の形の意外性と縄にかかった雪が地上に舞い降りる仮の姿として、時間を停止し纏わっている一瞬と共に、綾の内に囲われている常緑樹の緑色との色彩対比が、筆舌に尽し難い余情の美を醸し出してくれる。

春一金沢の春は、アンズ、モモ、ナシ、ソメイヨシノの花が市街、郊外の此処彼処に咲き乱れ、市の中心部を流れ、日本海にそそぐ犀川、浅野川の両岸から迫り上る寺町や小立野の台

地から、卯辰山麓といわれる東部丘陵地帯まで、その起伏に富んだ市街地の立体的景観は、街中が絵になると思われる程秋に負けずに美しい。中央地区においては中明度の5GY系の萌木色（Pea Green）がグラフからも読めるように、これもまた緑なす日本の平均的春の色でもある。緑味の深い黄味の多い町は、目に安らぎと心に落ち着きを回復させる良薬でもある。ただ、前述のように、常にコンクリート群の色域が樹木景観とほとんど係りなく塊となって5PB系を中心として現われるため、色彩環境としてのユートピアになかなか近づけないが、石川県庁周辺から中央公園一帯の色彩は、県庁新庁舎の赤錆色（Rusty Red）から茜色（Madder Red）めいたタイルの肌理細かさや、旧四高の赤レンガと木々との色相対比（Contrast of Hue）は完璧である。同様な意味からも金沢市役所の近代折衷主義様式の洋式の本庁舎は是非保存してほしい視覚的享受に耐える建造物である。人間にとって無駄のある風景や、有孔体のような不思議な空間を持つ、冗長度の高い建造物は、常に精神的緩衝帯として必要であり、それらが形態的、色彩的、材質的に無理なく淘汰され、組合わされて出来たとき、そこは住みよい都市空間となる。

一瞬にして散り失せてしまう桜の花は、街の色彩景観として、紅白の広告入り行燈看板や、螺旋に巻かれた紅白の渡し木と共に、実景というよりも仮象、仮現景観といえよう。桜の花は種類が多く一色をもって限定できないが、桜色（Pale Rose）、紫みのごくうすい赤ということになるだろうか、現在のように人工色のない時代、桜や紅い色をした花、などはいかに人々の心をとらえたことだろう。

夏一調査グラフからみた夏の色相は完全な青みの緑である緑色（Spectrum Green）の移行がみられ5G $\frac{1}{2}$ 、5G $\frac{1}{4}$ 、5G $\frac{3}{4}$ 、や夏草にみる青緑（Blue Green）、5BG $\frac{1}{10}$ 、などが主役となる。ここではPB系の低彩度で紫みの暗い青のアスファルトやコンクリートビルが緑にかなり覆われてしまうことが解る。緑の都市金沢を形成するためにも金沢に従来からある庭木

や街路樹、アオギリ、エノキ、ハゼ、スズカケノキ、イチョウ、ウンリュウヤナギ、シダレヤナギ、ノニレ、ソメイヨシノ、クロマツに加えてマロニエ、トウカエデ、ユリノキ、ポプラ、フウ（楓）、メタセコイアなどの外来種やホウノキ、ドロノキ、ケヤキ、カラマツ、カツラ、ブナなどを植えたらい(2)との正宗巖敬氏の緑化提案をあらためて憶い出す。

5 Y系で黄土色 (Ochre) から芥子色 (Mustard Yellow) の長町1丁目、2丁目境界にみられる長土塀は、もともと甲風流の兵法による戦術街路であり、その狭さ、丁字形と石積土壁の明るい色彩が、夏の強い日射しの樹陰の背景となって近世城下町のタイムトンネルへ誘ってくれる。風土に適した色と形と材料の絶妙な構成は、土壁の消音効果も加わり、都市空間として芸術的でさえある。

色相の量としては少いが大変気に掛けることは、純色の赤ないし赤紫系が予想通りプロットされたことである。主に交通標識、非常用標識、防火表示や郵便ポスト、公衆電話以外は広告全般である、商業行為も生産活動であるが故に、販売促進機能としての広告物を否定するわけではないが、巨大空間がそれによって独占された場合、行きずりの不特定多数の人間にとっては、それを視ることの選択の自由がないままに視覚に飛込んでくることへの疑義である。巨大広告やスーパーグラフィック (Super Graphic) の極彩色面などが醸し出す現代の文化的情念といわれるものと、それをパブリックメディア (Public Media) として真に必要なとするか否かの問題は早急に論議されねばならないとききている。

小さな露地に突出している看板類の色彩も、街の景観を独占し、破壊しているものが多い。アミューズメントセンターが色とりどりに活気を帯びるのは当然であるが、静かな町家の並ぶ住宅街に設備された夥しい広告看板、表示物の色彩と、形態をどのようにするか今後大きな問題となるであろう。因に現在、商業施設としてのサインボード類は次のように分類されている。

①スタンドサイン②立かけサイン③吊下げサイ

ン④ウインドサイン⑤POPサイン⑥突出しサイン⑦壁面 (軒先) サイン⑧垂下げサイン⑨オーニングサイン⑩広告塔サイン⑪屋上サイン (建値、野立サイン類) などであるが(3)これらは周知のようにほとんどプラスチックのような硬質樹脂類かペンキ塗装又はガラス加工によりなされており、個々の商店が全国同じ形式、構造を持ちつつあるため、景観造景上、それぞれの都市の特徴との対比が今後いろいろ工夫されねばならなくなってきた。

近年このような商業生産活動における龐大な需要に対し、商業施設、計画施行の責任管理資格構機として、省令による国家試験を経た商業施設士が誕生したことは、改善への具体化として意義がある。すでは昭和24年には、屋外広告物法が施行され、(法律第189号) 美観風致がうたわれており、東京都を始め、各都道府県でも殆んどそれらの規制規則を保持しているのに、いつのまにか美しい日本の風景が破壊されてしまったのは何故だろうか。

カラーアセスメント (色彩の及ぼす環境への影響についての事前評価) の例として、京都産寧坂を中心とする歴史的街並保存の色彩規制は既に知られているが、最近では宮崎県が、全県ぐるみで景観を大切にするためのカラーアセスメントを開始したことは自治体行政史の面から画期的なことである、色彩規制についてはかつて第2次大戦の最中、国防上の見地から全国のバスを藤鼠色、藍鼠色、国防色の3色のうちいづれかに塗り替えるよう通達が出された (朝日新聞S. 18. 8. 12) 珍事があったが、敵機の攻撃を避けるための迷彩とはいえ色を楽しむという人間にとっての基本的欲求に対してバランスを崩すことにおいては、今日の色彩過剰のアンバランスと同一である。昭和50年3月に、九州芸術工科大学今井研究室により報告された、福岡市都市計画局主管の「屋外広告物の色彩モデル地区に関する報告書」は、大都市の集住密集地域における人間環境への基本的問題提起と解決策として、注目される。中央地区にみられ

る神社仏閣の色は、前田家4代藩主光高が、寛永年間に、徳川家康を奉るために権現造りとして建立した朱塗りの尾崎神社（重要文化財）である。弁柄漆塗りの美しい黄赤色は、金沢城内から現在地に移された明治の初め以来、金沢の人々に精神的支柱と共に、全て朱塗りという非日常的空間経験として思い出景観を育ててきたことだろう。それは、近くにある藩祖、前田利家を奉り、三層ギャマンのエキゾチックな神燈で知られる尾山神社（重要文化財）についても、色彩経験としては、当時の人々を長い間驚かせてきたこととおもわれる。

Fig. 2 — 「卯辰山麓地区」における色相分布。

秋—この地は17C初め、金沢が武士や町人で賑い始めた頃、「城下各所に散在していた真宗の寺院以外の寺院が泉野や卯辰山の地に集められた」(4) 大小50近い寺院が卯辰山麓に寺院町を形成している。庭に咲く花や木々が、秋には高明度のさえた黄色（Yellow）から黄薬色

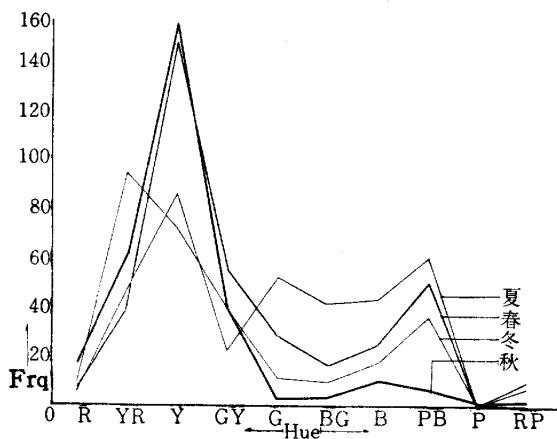


Fig. 2

(Chrome Lemon), におい感じの黄色まで季節感を拡げ、中央都心区においてYR系であったものから、Y系への移行が、植生の違いと町全体に木造建築が密集していることからくるその持つ暗い黄から、暗い灰色にかけてのカラーゾーンが主調となって、明確にY系の都市景観色が浮んでいる。春も同様なカーブをみるのは、この地区に常緑樹の大木が少いせいであ

ろうか。また秋は、落葉が土色の庭や、小路までも覆い5PB系が極端に少なくなってしまう。この地域には広大な道路といえは国道8号線以外1本もない。

冬—落葉の後にくる冬の色は、木枯しのごくうすい黄赤、淡香色（Vanilla）、赤白椽（Cornhus）の5YRのゾーンに基調色が移り、加えて5RP系から5YR系に至る、赤味のほとんどない赤紫から、低彩、低明度の黄味の屋根瓦の色彩が、寺院群の多い町のシンボルカラー（色彩象徴）となる。この期には、中央区域で目立ったプラスチック類の看板、公共表示物、交通標識の他、ポリバケツや、ビニールの青いごみ袋、ビールのスタッキングボックス（Stuckig Boox）が機能として必要な明視性以上に町の景観を阻害していることが解る。また伝統的色彩や、落着きを守るために工夫されたカラートタンは、ベージュ（French Beige）、5YR系が多いがテクスチュア（肌理）が木材と全く違うため、強光沢なものは避けて使う必要がある。中央地区のところでも触れたように、降雪時における色彩景観は、雪による乱反射を受けて普段見えている世界と全く異ったコントラストの強い光輝さえ感じることが出来る。

春—全山緑、山麓下の町々は、淡く高明度な利休白茶（Oyster White）を想わせる色から、におい黄緑にみえる若芽色（Sprout）や萌木色（Pea Green）まで、暗く長い冬から一挙に待ち詫びた緑一色になる。おそらく都市空間でこれだけ明快な緑の色域を示すコミュニティーが日本の都市にどれだけ残っているだろうか。静かな美しいたたずまいである。

夏—この季節の色相変化は、5Y系と5G系、5BG系、5B系が主にほぼ一定量を示しており老竹色（Egshell Green）や青みの緑、いわゆる緑色（Spectrum Green）、青緑（Blue Green）、錆浅葱（Agua-marine）のような緑みのうすい青、それに錆御納戸（Gobelin Blue）などがバラエティーに富んだ色彩景観を示してくれる。ここでも中央地区の5G系の多い単一的景観よりも均衡のとれた色彩を、この町の人

々は生れながら楽しんでいる。おそらく大都会のビル谷間に育ったものと、このような自然の残る環境に育った人間の経験蓄積からくる情操の質は、生活感情や感性感情形成期の官能的経験や精神的感受の構造が積み上げられたものの差異として現れるのではないだろうか。金沢市は、昭和51年度の重点施策として、教育、中小企業、農林、下水、水害と共に緑化対策を掲げているが、生態系の一部としての森の都の植生復元に全力をそそぐ時がきているといわねばならない。

Fig.3—「中央地区」における明度分布。

秋—表色された色彩値から、その意味を読むことは、色相、明度、彩度各々にわたって相関があるため、短絡した結論は差し控えねばならないが、この図に表われたように、木々の繁る夏には、明度差はバランスを保つが秋から冬にかけては、落葉の後の都心のコンクリートが明度を押し上げていることは確かである。色彩受容における明度刺激は、物の形を認識する手段としても不可欠な要因である。色彩の明暗を知ることは、色相や彩度へのアプローチ以上に色彩現象の判断には大切である。都心を含む中央地区は、Fig.4の卯辰山麓地区と比較しても全体に明るいことがよく解るであろう。秋から冬にかけて尖塔型に迫り出したグラフは、ビルディングのN%, N%という銀灰色(Pearl Gray)に近い、明るい灰色からP%, ~PB%に至る青みを含んだうすい青に至る無彩色や、

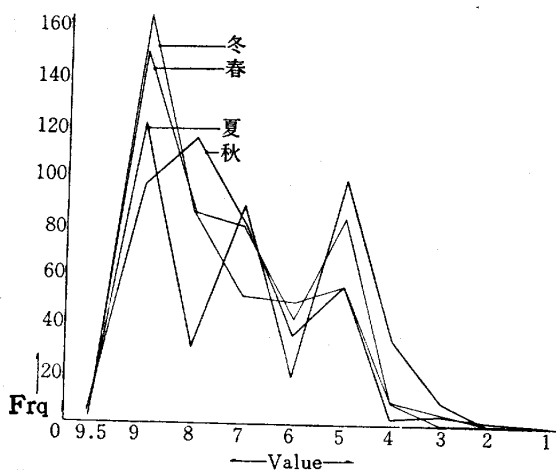


Fig. 3

無彩色に近いものの反映であるが、この現象からくる景観効果は、長く暗い北陸の都市風土に明るさと快活を注入すると考える場合と、墨を流したような鈍空を背景に、対比的に増々白く浮ぶ無機質で非人間的空間を生むと考えるかどうかの二極に分かれる。

冬—秋以上に明度の増した原因は、人工造営物にその多くをみるが、車道や歩道のコンクリート、アスファルトからの影響も視覚領域において大であることを忘れてはならない。近頃は歩行者天国の考えもあって、カラータイルや、アスファルトのカラー舗道が各地に見受けられるが、大通りのアーケード街は別として、道は、元来棟割長屋であったころから町の人々には、共有の生活空間であり、現在でも単に通過者の占有スペースでなく、公共と私用の中位空間である道のカラー調整は、ペイント技術を超えて慎重でなければならない。

春—明るい木の芽、若葉、花が一斉に咲き中明度が多くなってくると、5B系から5PB系の色相にみられたコンクリートやモルタルカラー吹付の壁面やブロック塀、石垣、明るい屋根瓦、カラートタン、アルミサッシ窓枠などが依然高明度を保つ要因となり、特にアルミサッシの窓枠風景は、メタリックハイトーン(Metaric high tone)として、かつて都市の風景になかった材質であり、気密性を思わせる金属フレームと、木造家屋とのジョイント感覚が別の意味、つまり日本の翻訳文化のモデルをそこにみる。明度5を押し上げているのは常緑樹である。

夏—明度9のカーブ内容は、冬、春と変らぬ構築物によるものであるが、木の繁りが多くなる季節は、グリーン系が圧倒的になり明度5と7にそれがみられ、その間が低くなっているのが興味深い、伝統色で言う老竹色(Eggshell Green)、青みの明るい灰色と、緑色(Spectrum Green)の間が割合少いのがFig.4の卯辰山麓地区の明度においても同様の傾向である。

Fig 4 —「卯辰山麓地区」における明度。

秋—この地域の明度分布は、色相分布が、イエロー、ベージュ系を中心に史的都市金沢の色彩を強く印象づけていたのと平行して、明度8のピークが、紅葉や、木造家屋、石積、石垣などに集中しているのが目立つ。黒に近い極端な低明度は、秋に限らず見ることができないが、かつて金沢のそこそこには黒板塀が相当ありより街の明度を落していたが現在はすっかり姿を消してしまった。また先に述べた広告物や交通標識の赤色は、中明度のためにこのグラフだけでは埋設して読みとれない。色相や彩度のグラフとの対照により景観の色彩は確かめられる。

冬—中明度よりやや明るめを中心にした。穏やかな山なりのカーブは、暗く沈んだ自然の明暗に支えられた冬の北陸の古都にふさわしい階調であり、この曲線から金沢の伝統色の全てが読みとれる気さえする。現在の調査では、この地域により特徴を読むことができるが、むしろ中央地区もかつては同様の曲線であり、次に述べるような文化の香りを保持しているところである。金沢を彩る色は、その意味では都市空間外部に咲く色よりも内なる生活と結ばれた空間に育まれた五彩の九谷焼があり、加賀友禅のような、多色相高彩度絢爛豪華な配色を生み、また朱や緑、群青の砂壁による室内の色彩設計が施されていた。

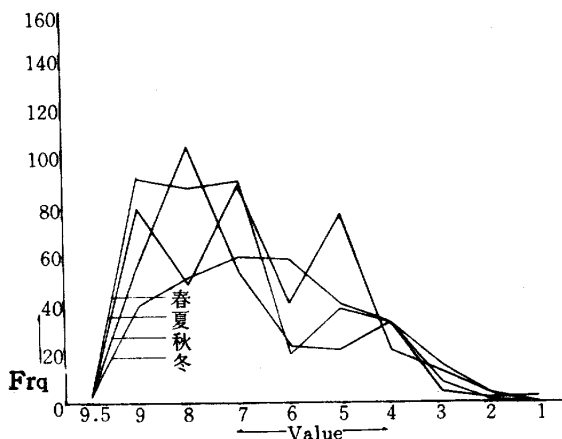


Fig. 4

格子構造の、赤味の深い黄赤の弁柄色（または紅殻色 Copper Brown 10R4/8）漆塗り（弁柄着色後生うるしを塗り、ぼろ布でふきとる）の町家の建付も今は少なくなったが、品格のある

色合を街並景観にそえている。これは外部空間に向けられた色であっても、道がコミュニティーぐるみの共有空間であれば、それもまた町内内部空間の色であったろう。外に展開している色彩例は、金沢近郊6 kmの戸室山（とむろ）から産出する安山岩質の戸室石は、赤戸室石と青戸室石があり、金沢城石川門にも使われているが、色彩学でいう濡れ色現象が起り、その変化は、庭石になったり、石積塀になったりして、雨の多いこの地方の気候と一体となって景観物になっている。内なる色はまた、茶の湯の隆盛と相俟って和菓子の世界に彩りをそえ、落雁や季節ものの雅やかな加賀の和菓子文化を今に伝え、人々を驚かす。金沢に古くから伝わる郷土頑具の色彩も色域一杯に広がって鮮やかであり、そこに凝らされた造形的創意工夫は子供ならず大人の知的遊戯空間さえ広げてくれる。

春—Y系に集中していた青葉、若葉の色相差は明度系列で読むと若芽色 (Sprout) のようなにぶい黄緑や、萌木色 (Pea Green) のような緑みの黄緑がかった色は、明るさも7から8前後になり、春の気怠いような明度感が伝わってくる。明度9は、この地域の建造物の主観色が与えている明度で、春夏秋冬余り変わらずプロットされる。明度の5~4のうち、低明度は樹木の中でも常緑樹などによる分布である。

夏—明度の高いポイントは、夏故の強い陽射しが影響しているが、成育し繁ったY系の木々は、逆に明度を落としG系中明度の指数が上昇する。ごく自然のここのように思われるが、片寄らない値生生態の存在が確認され、環境の安定が感じられる意味は大きい。5PB系は空色 (Sky Blue)、紫味のうすい青で夏空そのものである。

Fig 5 「中央コース」における四季の彩度分布。

秋—色彩現象における彩度は、スペクトル純度の飽和状態として、色相における波長、明度におけるエネルギー水準と共に色彩理論の主要因であるが、一般にいう鮮やかさの度合は、多数の色彩現象の対比の中で視認比較されるの

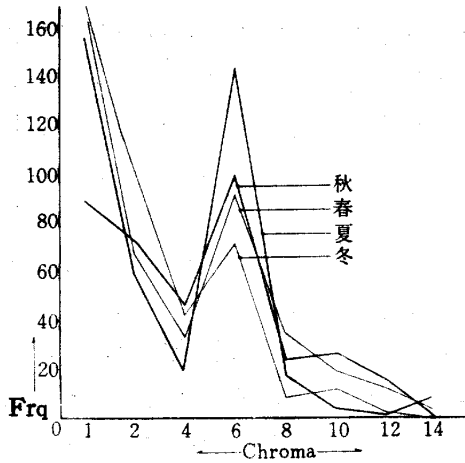


Fig. 5

で、その傾向把握はデリケートである。中央区域の彩度は、彩度1に位する低彩度と、彩度6の中彩度に傾きがあり、ほぼ各シーズンともに異同がないのが注目される。1に集ったのは、四季により変化する空の5B%の周辺と、アスファルトや建造物、特に木材以外の建材コンクリートビル等の低彩度集魂でありN%, N%, 5PB%, 5PB%, 屋根瓦の5RP%—5YR%の範囲である。中明度6の集合は、常緑樹を中心に公園の芝生などが影響している5G%, 5G%, 5G%などである。

秋の低彩度の落込みは、5B%や、藍白のような緑味のごくうすい青に至る空色の拡がりがあるためである。樹木の紅葉によって5YR系から5Y系にかけて彩度が上っているのは、錦秋を見ている想いがする。またこの10以上の高彩度には看板類が各シーズンともプロットされている。高彩度の赤い看板が多いのは、主として中央区ビル街のものである。

冬—低彩度ゾーンの多大なのはPB%のコンクリートや、PB%のアスファルトが冬には剥き出しになるため高明度で低彩度のニュートラルグレイ (Neutral Grey) の鼠色 (Mineral Gray) の色彩環境の結果と考えられる。他の中明度の少いのは常緑樹の5G系のみが集計された結果である。卯辰山麓地区のこの集積は少い。

春—低彩度は既に述べた通り、都心の色と空の色である。彩度4において落込みが共通してみられるのは、緑の多さが明確になる彩度が6中心であること、環境を構成する基本色が大部

分低彩度で形成され、あいまいな彩度と高彩度に色彩環境の中心はこない。

夏—低彩度1については各シーズン同様である中彩度6は5BG系と5G系のにぶい緑といわれる草色や青みの入った夏の緑色が (Spectrum Green) が中心で集中したと考えられる。彩度14に若干のポイントのあるのは季節色としての日除けテントの赤色が入ったためであるが、春の桜の紅のように季節感のある色彩要素についても景観構成上も注意を払ってゆかねばならない。

Fig 6 「卯辰山麓コース」における四季の彩度分布」。

秋—卯辰山麓地区の秋は、一様に極く低彩

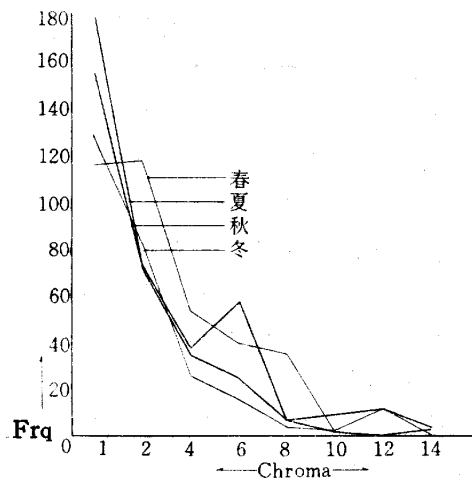


Fig. 6

度に傾斜しているがY系が圧倒的に多く、その内容は、紅葉や、石垣、木造家屋を主体に見ることができる。やや色相は5Yから離れるが、赤みの暗い灰黄である生壁色 (Olive Drob) やごく暗い黄の鶯茶 (Olive), 明るさのあって低彩度の利休白茶 (Oysterwhite), 緑味の暗い灰黄である鶯茶 (Old Mass) などである。高彩度の12が秋にあるのは木の葉が散って隠れ気味であった寺院の朱色 (French Vermilion) や、看板の赤、時には公衆電話の赤などが視界に入ったものである。

冬—冬も秋とほとんど変らない曲線を示しているが、内容はY系やGY系は極端に減りPB系の空の色と枯木のY系の低彩度が冬の感じを

一層極立たせている。明色 (Tint Color) と暗色 (Shade Color) から予見する程の明確な意味づけが出来ないが、全般に、落ち着いた季節であることに 변りない。

春—全体に彩度が右寄りとなり、春の陽光と、花咲く季節が彩度を高めていることがよく解る。それらはY系とGY系であり、1, 2を高めているのはY系の明るくて、まだ緑味のうすい蒸栗色 (Citrus Yellow) などである。

夏—YR, Y, G, BG, B, PBの各系に低彩度1が分布しており、YR系からY系については桑色白茶 (Malmaison) の灰黄色からうす黄の系統が、また真夏の光の強さが繊細な彩度を消し去る格好となって無彩色に近く、かなり明るい5PB%~5PB%のような味気ない色彩環境の一面をみせている。しかし彩度6前後に現われたG系や、5BG%の夏草あるいは若竹色 (Porcelais Green) や青竹色 (Solhpate Green) などもある。

おわりに

以上試みた若干の考察で浮んできた金沢の都市像には、いままで金沢について語られ、解明されてきた都市観想、歴史的伝統都市、城下都市、情念の都市、文化学問都市、地方中枢(核)都市、流通消費都市に加えて、美的都市、色彩都市をその範疇に考えねばならないのではないかと思うようになった。従来の都市腑分の多くは、その政治基盤、経済規模、流通拠点、集住形態、地理条件、人口集積など、どちらかといえば計量実体的、形式に重点が置かれ分析されてきたが、人間の行動様式は、殊に都市化の激しい今日の状況においては、常に浮遊、非定住的であり、都市共同体としてのコミュニティーの崩壊が常に予想されるような不安定さが都市の特徴となるに至った。それらは、都市社会学や社会病理学の研究対称ともなり得てきたが、より都市像を明確にするためには、柳田国男氏がかって「水色ペンキ塗りの建物一つをみてもわかる」とその研究、「都市と農村」で表わした、わずかな色彩現象の一端にも、田園都市と郊外生活者の背景にある郊外都市が中央勢力を

嚮導すると共に、文化の単調さを助長している」と看破したような景観からの接近も、今後一層有効になってくるといふ点である。柳田国男氏は、おそらく、鮮やかなペンキに日本の「色」ならざる「カラー」の思想をみて、農村と都市と日本の行方を凝視していたのではないだろうか。

金沢が都市としての意識を持つとき、その色彩により、その美的感覚の総体によって位置づけられることも充分ありうると見做してよいのではないだろうか。金沢を象徴する色彩は、多くの人々は茶色系 (Sepiazone) だという。茶褐色系はまた土の色であり、環境を支える基幹色でもある。その基底となるセピアと日本海の蒼さと、背景をなす医王山系の山なみの、四季の色彩と一体となった美しい金沢がいつまで続くだろうか、都市の色彩を診ることはさように都市の行方を案ずることでもある。

註

- (1) 正宗徹敬「金沢市と街路樹」p. 1~6 金沢美大 学報9号 (1965)
- (2) 同上学報
- (3) 技術大系編さん委員会「商業施設技術大系」p. III56 商業施設技術団体連合会 (S. 49)
- (4) 田中喜男「城下町金沢」p. 3 日本書院 (S. 44)

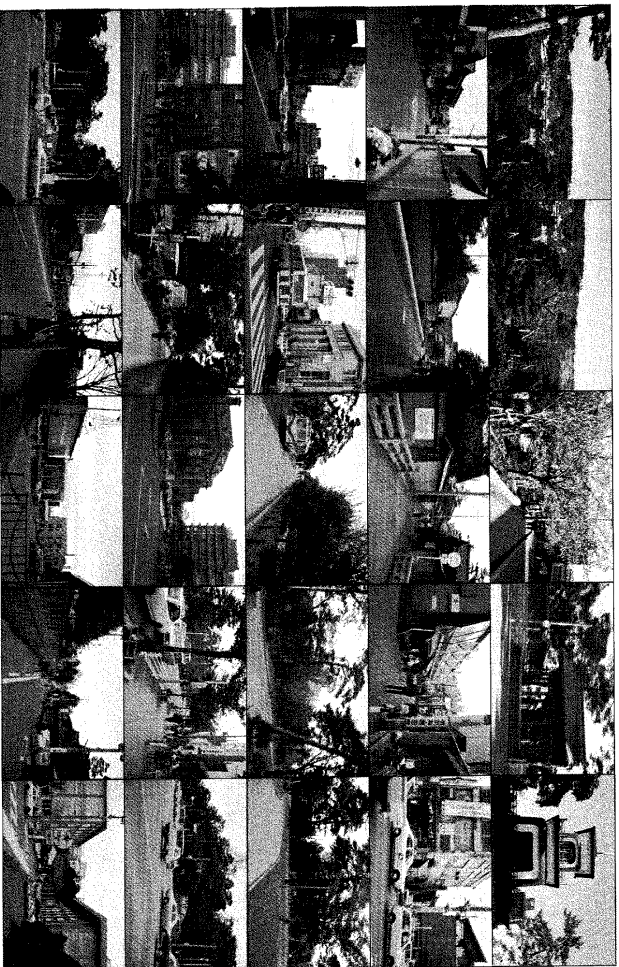
参考文献

- アルンハイム・関計夫訳「視覚的思考」(美術出版社 1974)
- 石川県広報研究会編「石川」(石川県広報研究会S. 47)
- 石川県土木部都市計画課「風致地区内における建築等の規制に関する条例」(S. 45)
- 「石川県環境白書」(石川県公害環境部S. 49)
- 石川県「石川県屋外広告物条例」(S. 50)
- 井上靖他「私たちの風景」(毎日新聞社S. 50)
- G. エクボ・久保貞・中村一・吉田博宣・上杉武夫訳「景観論」(鹿島出版会S. 47)
- 勝本正晃「眺望権について」(「環境研究」公害調査センター1972)
- 金沢市「金沢市緑化推進要綱」(金沢市S. 49)
- 金沢市建設部公園緑地課「金沢市伝統環境保存条例」

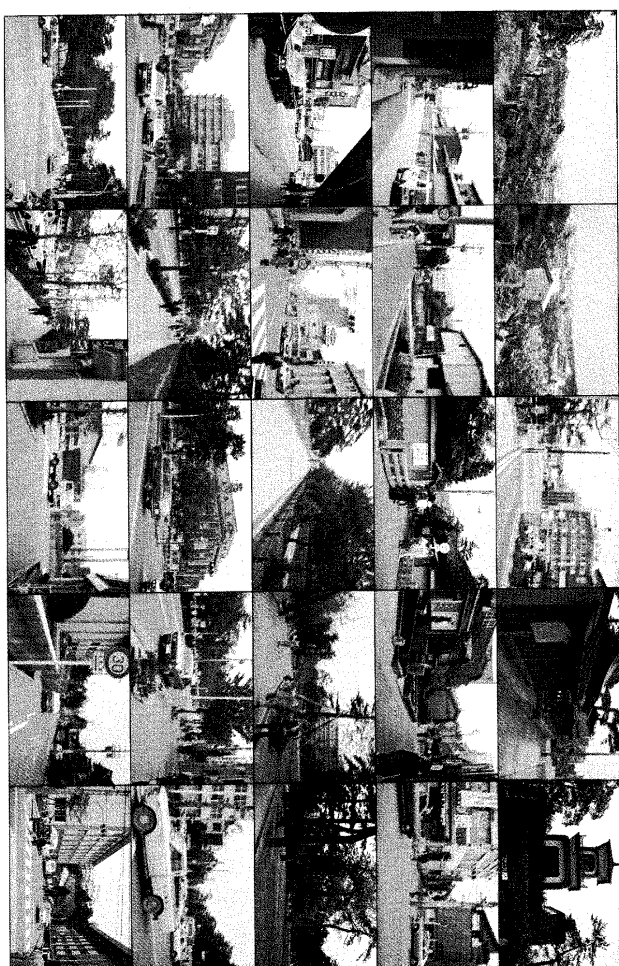
- S. 43)
- 金沢市企画調整部調査統計課編「金沢市勢要覧」(金沢市役所S. 50)
- 金沢市企画調整部企画課「金沢市新長期計画1974—1985」(金沢市S. 50)
- 小磯稔「色彩の科学」(美術出版社1972)
- 沢田允茂「認識の風景」(岩波書店1975)
- O. B. ジャッド・G. ヴイスツェッキー・本明寛訳「応用色彩学」(ダイヤモンド社S. 39)
- 総合デザイナー協会「日本の色」(毎日新聞社S. 40)
- 武井邦彦「日本色彩事典」(笠間書院1973)
- 田中喜男・島村昇・山岸政雄「伝統都市空間論・金沢」(弘詢社1976)
- 都市デザイン研究体「日本の都市空間」彰国社S. 46
- 長谷川堯「都市廻廊」(相模書房S. 50)
- バジルウイリー・三田博雄・松本啓・森松健介訳
「十八世紀の自然思想」(みすず書房1975)
- 深田康算「美と芸術の理論」(白鳳社S. 46)
- 藤田福夫監修「金沢の文学」(北国出版社S. 46)
- 前田千寸「日本色彩文化史」(岩波書店S. 35)
- L. マンフォード・生田勉訳「都市の文化」(鹿島出版会S. 49)
- マックスウェーバー・世良晃志訳「都市の類型学」(創文社S. 49)
- 矢崎武夫「日本都市の発展過程」(弘文堂S. 49)
- 山岸政雄「都市景観の形成と美的環境をめぐって」(「環境研究」公害調査センター1975)
- リンチ・丹下健三・富田玲子訳「都市のイメージ」(岩波書店1968)
- ロン・ハーマン・平田翰那訳「造景計画カリフォルニアの場合」(「SD」7509) 鹿島出版会)
- 渡辺渉「そびえ立つ公害」(「展望」1975. 10)
- 和達清夫・倉嶋厚「雨・風・寒暑の話」(日本放送出版協会S. 49)
- Birren Faber "Creative Color" New York, Van Nostrand Reinhold Co. 1961.
- Bodo Cichy-General Editor "Architecture of the Ancient Civilization in color" Thames and Hudson, London. 1966.
- "Colour 73" International Colour Association, Adam Hilger London 1973.
- John Boeardman, Jose' Dörig, Werner Fuchs, Max Hirmer "Greek Art and Architecture" Harry N. Abrams, Inc. publishers New York.
- M. E. Chevreul Introduction and Notes by Faber Birren "The principles of Harmony" Reinhold publishing Co. New York 1967.
- Munsell, Albert H. "A Grammar of Color" New York, Cincinnati etc. Van Nostrand Reinhold Co., 1969.
- Robert W. Burnham, Randall M. Hanes, C. James Bartleson "Color a guide to basic facts and Concept" John Wiley & Sons, Inc, New York 1963
- Werner Hofman and Udo Kultermann "Modern Architecture in color" Thames and Hudson London 1970.

(以上)

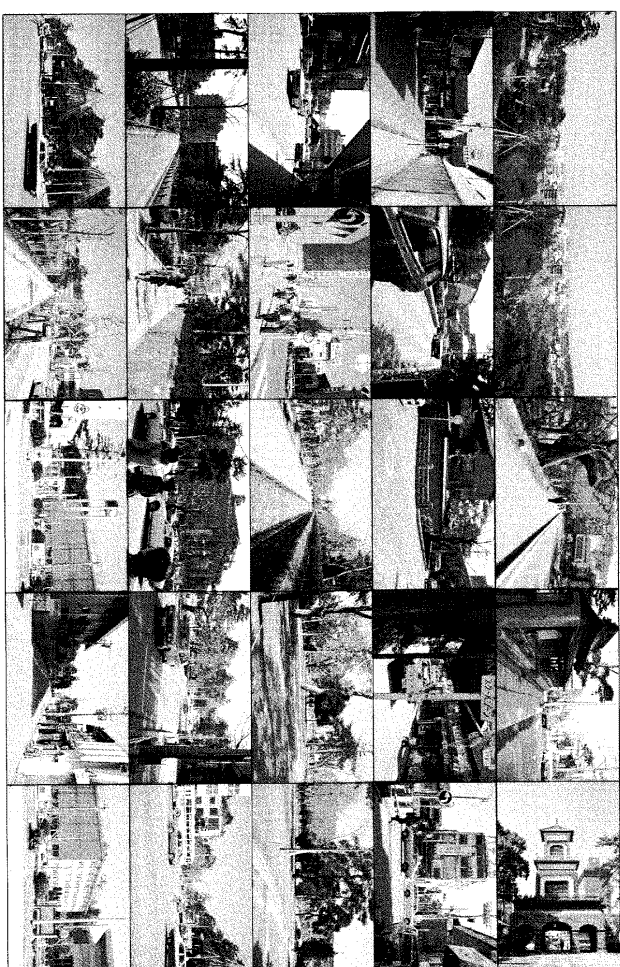
The Colorful spectacles in the central area of kanazawa city <1974—1975>



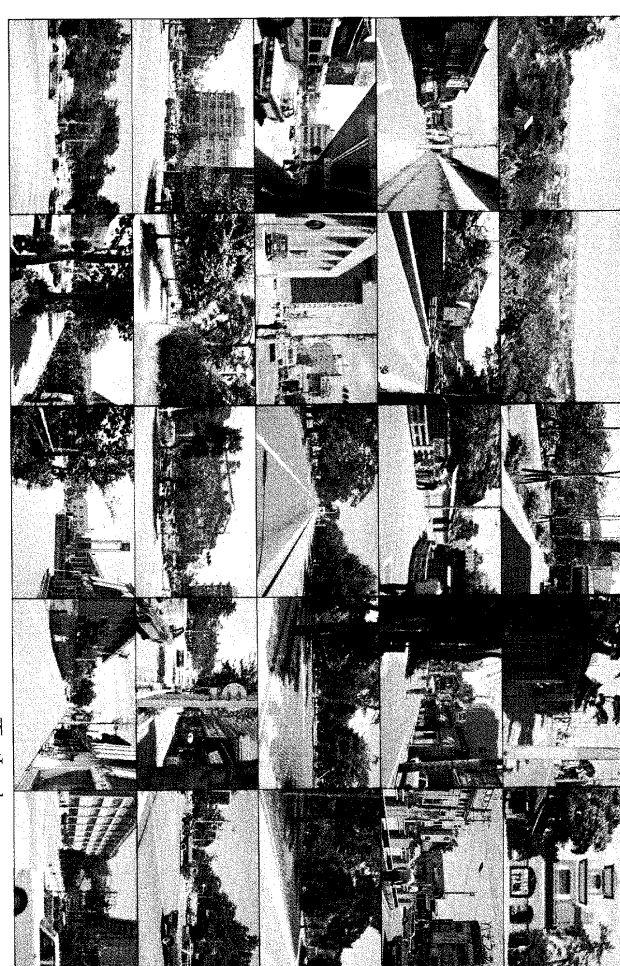
秋 <In the autumn season>



春 <In the spring season>



冬 <In the winter season>



夏 <In the summer season>